

- ◆ 夏まきダイコンの9月出荷を目指して ～播種時期と資材の検討～
- ◆ スプレーストックの長期出荷 ～東京切花倶楽部の取組～
- ◆ 光誘引によるコナジラミ類の防除 ～トマト抑制栽培での取組～
- ◆ 南多摩の採卵経営 ～消費者目線で効率経営～
- ◆ 新たな農業経営へのチャレンジを応援 ～「チャレンジ農業支援事業」の紹介～
- ◆ ウメの早期成園化技術の実証 ～ウメ産地の再生に向けて～
- ◆ 一口メモ：端境期対策の抑制エダマメ
- ◆ 一口メモ：簡易な制御装置を利用したトマト栽培
- ◆ お知らせ

東京農業 & TOKYO



中央農業改良
普及センター

夏まきダイコンの 9月出荷を目指して

～播種時期と資材の検討～

立川市にある直売所「みのーれ」では、例年ダイコンが出荷されるのは10月中旬以降です。そこで、普及センターでは出荷時期を早くするために、9月収穫を目指して夏まきダイコンの展示ほを設置し、播種時期と資材の検討を行いました。

播種時期の検討

地温抑制効果が期待できるマルチ「チョーハンシヤ」を用いて、降雨後の7月18日、8月7日に株間30cmで播種しました。品種は「夏つかさ」（トーホク）を用い、8月下旬まで遮光目的でサンサンネット（目合い1mm）をトンネル被覆しました。発芽率は7月18日播種が77%、8月7日が89%でしたが、3粒播種であったため欠株は発生しませんでした。

7月18日播種で、目標の9月中に収穫ができましたが、形の乱れや、横縞症の発生、キスジノミハムシの幼虫による食害などがみられたため、販売できるものは少なくなりました。8月7日播種では9月中には収穫できず、10月上旬の収穫となりました。しかし、7月18日播種でみられた障害等は発生せず、秀品が収穫でき、販売は好調でした。

表1 収穫物調査

播種日	調査日	根長 (cm)	根径 (cm)	根重 (g)
7月18日	9月17日	29.6	7.3	980
8月7日	10月6日	31.4	6.8	800



写真1 7月18日播種(左)、8月7日播種(右)の収穫物

資材の検討

品種「夏つかさ快」（トーホク）を8月3日に播種し、表2のマルチ資材と被覆資材の組合せで栽培しました。地表下5cmの地温は、「チョーハンシヤ」と寒冷紗の組み合わせが最も低く抑えられました（データ省略）。黒マルチも試しましたが発芽率が悪く、実用性はありませんでした。

10月2日に収穫物を調査したところ、「チョーハンシヤ」を使用したものは収穫が早く、白黒マルチはやや収穫が遅れました。白黒マルチのものは「チョーハンシヤ」に比べやや根重が軽い傾向にありましたが、品質は問題ありませんでした。9月中に収穫できるよう取り組みましたが、10月になりました。いずれも肌の状態が良好で、「みのーれ」において1本200円でも販売は好調でした。

表2 収穫物調査（8月3日播種、10月2日調査）

マルチ資材	被覆資材	根長 (cm)	根径 (cm)	根重 (g)
チョーハンシヤ	寒冷紗（白）	30.9	6.8	815
	防虫ネット（1mm目）	33.8	6.7	811
	青パオパオ	32.0	6.6	806
白黒マルチ	寒冷紗（白）	30.3	6.7	760
	防虫ネット（1mm目）	29.9	6.6	689
	青パオパオ	33.5	6.5	798



写真2 収穫物（各区2本ずつ）

本年は高温、害虫の発生などで9月出荷はできませんでしたが、10月初旬に出荷できました。

普及センターでは、今後も直売所における売れ筋品目の新たな作型導入を進めていきます。

中央農業改良
普及センター

スプレーストックの長期出荷

～東京切花倶楽部の取組～

栽培管理のポイント

品種：茎の上部で分枝するタイプの品種はボリュームがあるため、1本での販売が可能です。また、直売では一重咲きでも販売可能ですが、ボリュームは一重咲きより八重咲きの方が勝ります。

高品質の切花生産のために苗の八重鑑別作業を行うほか、色によってはオールダブル品種（ほぼすべての種が八重咲きとなる品種）もありますので、その導入もご検討ください。

温度管理：栽培は無加温施設で十分ですが、ハウス内温度が5℃以下にならないよう、冬は被覆などの保温対策を行います。また、春は施設内が20℃以上にならないように換気を行います。

病害虫：特に育苗期～10月頃まで、ヨトウムシ類、アオムシ類の発生が多くなります。施設内で育苗する場合は開口部にネットを展張し、定植時には粒剤を施用する等の対策を行ってください。

摘芯：摘芯してから、開花までは約1ヶ月です。摘心が遅れると収穫も遅れるので注意してください。



写真 ストック栽培の現地検討会

今後の取組

「会」では、都内在住のおおむね45歳以上の農業者で直売向け切花栽培に取り組みたい方を対象に、会員の募集を行っています。興味のある方は普及センターまでお問い合わせください。

普及センターは今後も、直売向け切花の生産技術の向上と「会」の活動について支援していきます。

北多摩地域を中心に活動している直売切花研究組織「東京切花倶楽部」（以下「会」）では、会員16名が直売向け切花の栽培技術向上に取り組んでいます。「会」では毎年テーマを設定して試作・研修に取り組んでおり、平成10年の結成から延べ50品目、101品種の試作を行ってきました。

近年は「切花の需要が多い時期にいかに出荷するか」を目的として試作栽培に取り組んでいます。

今回、普及センターでは春の彼岸時期に出荷する品目の試作栽培について支援しましたので、紹介します。

栽培の概要

今回はスプレーストック「カルテット」シリーズ3品種、キンセンカ2品種とチューリップ1品種の計6品種を試作しました。その中でスプレーストックの栽培を紹介します。

平成25年9月15～20日に、セルトレイに播種しました。ストックは遺伝的に一重咲きと八重咲きの個体が約半分ずつ出現するので、八重咲き苗を残すため、適宜八重鑑別作業を行いました。10月上旬に株間12～15cmで無加温ハウス内に定植し、2月上旬に頂花の蕾が色づいてきた頃、第一分枝部分の付け根から上の花を摘芯しました。収穫の開始は3月上旬からとなりました。

また収穫期を広げるために、平成26年には7月下旬に播種を行ったところ、12月から収穫・出荷ができました。これらの結果により12月から長期に渡り出荷が可能となりました。

表 ストックの栽培暦

品目/月	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4
ストック	○	■	■	■	■	×	□	□	□	□

○：播種 ■：定植 ×：摘心 □：収穫

西多摩農業改良
普及センター

光誘引による コナジラミ類の防除

～トマト抑制栽培での取組～

JAあきがわ管内の農産物直売所では、トマトは人気品目であり、生産増大が求められています。

しかし、生産現場では、害虫であるコナジラミ類の防除に苦心しています。コナジラミ類は、黄化葉巻病のウイルスを媒介してトマトに致命的な被害を与えます。また、防除が困難なため農薬の散布回数が多くなりがちです。

そこで、普及センターでは、農薬に頼らない防除技術の確立に向け、光誘引によるコナジラミ類の防除方法を検討しました。

光誘引による防除器の活用

市販されている黄色蛍光灯を活用した防除器（以下「黄色灯」）は、コナジラミ類が黄色に誘引される性質を利用し、捕獲する器材です（写真）。この「黄色灯」を概ね1aに1個ずつ設置し（図1）、コナジラミ類の防除効果を設置施設と未設置施設で比較・調査しました。



写真 黄色灯設置状況

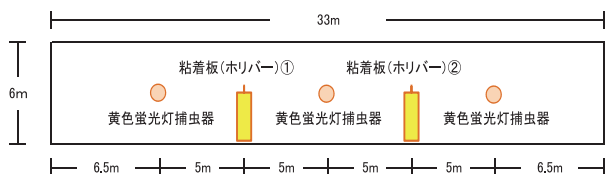


図1 黄色灯設置位置

コナジラミ類の防除効果

8月中旬から、黄色粘着板1枚あたりのコナジラミ類の捕獲数を、週1回調査した結果、9月上旬まで比較的低い捕獲数で推移しました。しかし、9月中旬から、未設置施設、黄色灯設置施設共に捕獲数が増加しました。その後も未設置施設では捕獲数の増加が著しく、10月1日の調査では7,000頭を超す捕獲数となり、薬剤

散布後も、一時的にコナジラミ類の捕獲数は減少しましたが、高い数値で推移しました。

一方、黄色灯設置施設では9月下旬に2,000頭を超す捕獲数となりましたが、その後減少し、低い数値で推移しました。これは、コナジラミ類が「黄色灯」により捕殺され、密度が下がったものと考えられます（図2）。

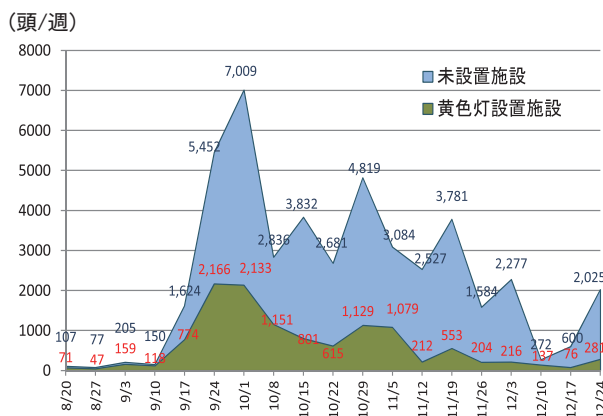


図2 黄色粘着板によるコナジラミ類捕獲数の推移

捕獲数が増加した9月中旬以降は、黄色灯設置施設では、未設置施設の2/3～1/10程度と少ない数でコナジラミ類の捕獲数が推移したことから、「黄色灯」はコナジラミ類防除に有効であることが確認できました。

調査期間中の薬剤散布は、未設置施設は6回、黄色灯設置施設は5回であり、黄色灯設置施設は1回少なくなりました。捕獲数の推移から、黄色灯設置施設ではあと1～2回は減らすことができたと考えられます。

今後の課題

「黄色灯」は、1台が約17,000円とやや高価であり、施設面積に応じてコストがかかるため、導入にあたり費用対効果の検討も必要です。

普及センターでは、施設面積やコナジラミ類の発生状況等を考慮し、導入を図っていきます。

南多摩農業改良
普及センター

南多摩の採卵経営

～消費者目線で効率経営～

一般に採卵養鶏の専業農家は、1経営体あたり飼養羽数は数万羽規模でないと経営が困難とされています。しかし、南多摩地区では1経営体あたり1,000～8,000羽ですが、羽数は少なくても様々な工夫により、優良な経営を行っている農家もいます。今回は、それらの優良事例における取組を紹介します。

直売で顧客と信頼関係を保つ

南多摩の養鶏農家は、直売出荷が中心で、飲食店等にも直接販売してきました。消費者の要望も取り入れ、積み重ねた信頼関係で、有利な販売が可能になっています。価格は中央卸売市場価格の1.5倍～3倍となっています。

販売に独自の工夫

販売先は、農産物共同直売所への出荷、農家直営売店、無人スタンド、スーパー、デパート、食堂、菓子店などが中心です。共同直売所以外は、農家個人の営業努力によって開拓してきた販売先です。

また宣伝にも力を入れ、マスコミの取材は衛生対策を徹底した上で、積極的に受け入れています（写真1）。



写真1 直営売店（左上） 無人スタンド（右）
TV局の取材風景（左下）

多様な品揃え

採卵鶏の種類は多様です。消費者がどうい

う鶏卵を欲しがるかを把握し、白玉、ピンク玉、赤玉、青玉、烏骨鶏卵などが販売されています。

また加工品の開発が行われています。加工品で多いのがプリンです。その他温泉卵、ロールケーキなど多彩な製品があります（写真2）。



写真2 加工品の例（プリン、カステラ）

飼養方法に一工夫

夏季の安定出荷には、鶏舎を涼しく保つことが重要です。普及センターでは、屋根への断熱性の高い資材の導入、植栽で西陽を避ける工夫、冷却システム導入等を進めてきました。更に、最適な生育環境を作るため、環境を完全制御した環境制御型鶏舎を設置している農家もあります（写真3）。



写真3 環境制御型鶏舎

飼料は農家による自家配合を中心とし、特色ある卵を生産しています。平成27年からは、飼料米を数戸の農家が給与しています。また独自の平飼い方式も行われ、採卵鶏の適度な運動と臭気対策につながっています。

疾病対策はワクチン接種、採卵鶏の定期更新、野生鳥獣との接触防止を中心に行っています。

都市化に対応した飼養方法

今後、養鶏農家が経営を続けるには臭気、害虫などの対策が欠かせません。また点在する養鶏農家に対し、飼養管理・経営情報を定期的に提供する必要があります。

普及センターは養鶏農家への支援を通じ、地域の鶏卵生産を盛り上げていきます。

農業振興事務所
農務課農政担当・
振興課
技術総合調整担当

新たな農業経営への チャレンジを応援 ～「チャレンジ農業支援事業」の紹介～

東京都では、今まで行ってきた「東京農業の産業力強化支援事業」、「農業経営サポート事業」でのソフト支援を見直し、平成28年度より「チャレンジ農業支援事業」を新たに実施します。この事業の内容等について紹介します。

「チャレンジ農業支援事業」とは

新たな経営展開を目指す意欲ある農業者の取組を支援するための、2本立ての事業となります。一つ目は「チャレンジ農業支援センター」の専門家派遣によるアドバイスの実施、二つ目は、都内産農産物の販売促進や、商品開発等の新たな取組についての費用助成です。

チャレンジ農業支援センターによる専門家派遣

東京の強みを生かした農業経営の強化を図るため、民間の専門家を派遣してアドバイスを行います。このことにより皆さんの創意工夫とチャレンジ精神を発揮した個性ある東京スタイルの経営展開を支援します。

例としては、①加工品開発、②ホームページ、インターネット等の活用、③農産物のパッケージやシールのデザイン提案、④直売所の運営改善策等の提案など、様々な内容となっています。

専門家のアドバイスを受けられる対象者は、都内のすべての農業者及び農業者で構成する団体等になります。

専門家派遣の受付は、(公財)東京都農林水産振興財団「チャレンジ農業支援センター」で行っています。申込み方法等については、チャレンジ農業支援センターまでお問い合わせください。

〒190-0013 立川市富士見町3-8-1
公益財団法人東京都農林水産振興財団(農業振興課内)「チャレンジ農業支援センター」
電話：042-524-3191

新たな取組への経費補助

意欲ある農業者とそのグループ、団体に対して、都内産農産物の販売促進や商品開発等の新たな取組について費用を助成し、力強い農業経営を促進します。



写真1 イベントでのPR用品（のぼり他）の製作

事業の例としては、①バスへの広告掲載、②チラシ・パンフレットの製作、③看板整備、④オリジナル出荷袋の製作、⑤ホームページの制作、⑥直売所調査などがあります。(写真1、2)



写真2
ジャムラベルの製作

補助の対象者と内容

補助の対象者は、認定農業者、認定新規就農者、チャレンジ農業支援センターから専門家派遣を受けた農業者、3戸以上の農家で構成する営農集団、農業法人（農業者だけで構成する法人に限る）などです。

補助の詳しい内容等については、農業振興事務所農務課農政担当または農林水産部ホームページでご確認ください。

○連絡先：農業振興事務所農務課農政担当
電話：042-548-4862

○東京都産業労働局農林水産部ホームページ
<http://www.sangyo-rodo.metro.tokyo.jp/nourin/nougyou/shinkou/challenge/>

農業振興事務所
振興課
技術総合調整担当

ウメの早期成園化技術の実証

～ウメ産地の再生に向けて～

東京都では、平成25年度から「プラムボックスウイルス緊急防除区域の農業復興対策事業」を実施しています。この事業では、ウメ輪紋ウイルス（プラムボックスウイルス）による感染樹廃棄後の農地再生に向けた基盤整備を推進しています。さらに、伐採により失われた梅園の早期再生により地域農業の復興と農家経営の安定化を図ることを目的に、ウメの早期成園化技術の実証試験に取り組んでいます。

この試験では、「樹体ジョイント仕立て」を中心に検討を行っており、その概要を紹介します。

樹体ジョイント仕立てとは

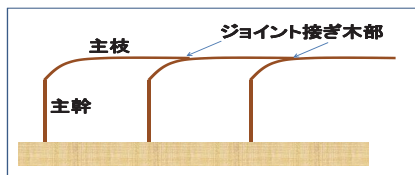


図 樹体ジョイント仕立て

神奈川県農業技術センターが開発したこの技術は、接ぎ木により

主枝の先端部を隣接樹の主幹肩部に連結し、複数の樹を直線状の集合樹に仕立てます（図）。そのメリットとして、①超早期成園化、②作業効率、安全性の向上、③生産コストの削減が挙げられます。

神奈川県の試験成果によると、6年生樹で成園並みの収量が確保されました。また、慣行栽培に比べ、収穫作業で約50%、剪定作業で25～35%労働時間が削減され、高所での作業や脚立の使用も無くなるため、安全性も確保されます。さらに、農薬散布量を30～40%削減できることがわかっています。

都内への適応性検討

今回の実証試験は、農林総合研究センターにおいて、樹体ジョイント仕立ての都内栽培品種における適応性を検討しています。供試品種は、「梅郷」、「玉英」、対照品種として「南高」との比較を行っています。

ジョイント仕立て用には、2年生の大苗を育成する必要があります。効率的な育苗方法について検討したところ、赤土と牛ふん堆肥を6：4の割合で混合した用土と不織布ポットを用いることで、新梢長2m以上の大苗を得ることができました。また、主幹を斜めにした状態で育苗（斜立育苗）することで、定植の際の主枝の誘引が容易になるとされています。主幹の斜立角度（30°～60°）を比較したところ、いずれの角度でも目標とする新梢長に達しました。さらに、接ぎ木時期を検討したところ、3月から7月のジョイント接ぎ木の活着率は75～100%と高いことがわかりました。

平成26年及び27年の春に大苗を圃場に定植し、ジョイント接ぎ木を行ったところ、いずれの品種も十分な新梢数が確保されました（写真）。今年度は、平成26年に定植した樹が初結実を迎えたため、結実状況を確認しています。



写真 ウメの樹体ジョイント仕立て実証試験

ウメ産地の再生に向けて

実証試験は、本格的な収穫を迎える平成30年度まで継続します。実施にあたり、関係機関（都庁、普及センター、農林総合研究センター、農業振興事務所）を構成員とするワーキンググループにおいて、情報共有や先進地視察を行い、構成員の意見や新たな知見を反映させています。

技術総合調整担当では、引き続き、ウメ輪紋ウイルスの防除対策と並行して、早期成園化技術の都内への適応性を検討していきます。

一口メモ

端境期対策の抑制エダマメ

小金井市の共同直売所である、JA東京むさし小金井ファーマーズマーケットでは、1～3月と8～10月が端境期であり、販売額が少なくなります。

そこで端境期対策として、近年、都内各地で栽培が増えている10月どりエダマメを導入し、有望性について展示ほで検討するとともに、出荷組織で現地検討会を開催しました。

現地検討会では8月に播種し10月に収穫する作型について、参加者からは「収穫物が少ない時期に出荷できる」「農薬の使用回数が少ないのがよい」等の声があがりました。また、収穫物は主にJA東京むさし小金井ファーマーズマーケットで販売し、好調な売れ行きでした。

展示は及び現地検討会の結果、10月どりエダマメは有望な作型であることがわかりましたが、①夏場の高温対策、②10月中に収穫を終わらせ、他の作物の収穫作業と競合させない、③10月のエダマメは珍しいのでいかにPRするか、という課題が見えました。

普及センターでは、課題の解消を図り、10月どりエダマメ栽培の定着に向けて支援していきます。



一口メモ

簡易な制御装置を利用したトマト栽培

町田市内の農家では、施設栽培における管理作業をより一層効率化させるために、簡易で安価な環境制御装置を利用したトマト栽培にチャレンジしています。

平成27年に、市内農家2戸が産業力強化支援事業を活用して環境制御技術の専門家からアドバイスを受け、簡易な制御装置を試作しました。

制御装置は、施設の高温対策を目的としたミスト噴霧の自動制御と、ポット栽培における省力化のための水分管理の自動制御で、いずれも試行錯誤を重ねながらトマト栽培施設で利用しています。

トマトは直売所において人気の高い品目であり、町田市内でも施設を利用したトマト栽培が増えていることから、普及センターでは農家やJAとともに、今後の実用化に向けて積極的に取り組んでいきます。



ミスト装置（左上）による噴霧の状況

お知らせ

◎農業機械・資材検討会（主催：東京都野菜生産団体連絡協議会）

日時：平成28年7月26日（火）9時～16時

会場：八王子市立加住小中学校（宮下分校舎）

27日（水）9時～15時30分

所在地：八王子市宮下町108-7

◎東京都エコ農産物認証の申請受付

受付期間：平成28年9月1日（木）～30日（金）

お問合せ・ご相談：各農業改良普及センター、振興課農業環境担当

●表紙写真：エダマメ現地検討会（小金井市）

◆お問い合わせは下記まで・・・

農業振興事務所中央農業改良普及センター

☎042-465-9882

農業振興事務所中央農業改良普及センター東部分室

☎03-3678-5905

農業振興事務所中央農業改良普及センター西部分室

☎03-3311-9950

農業振興事務所西多摩農業改良普及センター

☎0428-31-2374

農業振興事務所南多摩農業改良普及センター

☎042-674-5971

農業振興事務所振興課

☎042-548-5053

とうきょう普及インフォメーション98

印刷物規格表第1類
登録番号(27)11

平成28年7月1日発行

編集・発行 東京都農業振興事務所振興課

立川市錦町3-12-11

☎ 042-548-5053

FAX 042-548-4871

印刷 社会福祉法人 東京コロニー

☎ 042-394-1113

リサイクル適性 (A)

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。